

実践記録 2

「石川・学校図書館を考える会」の 30 年

下崎 睦子（石川・学校図書館を考える会）

1. はじめに

今回、「なぜ石川県では近年も学校司書配置が進んでいるのか」「今までの会としての考え（なぜ専門・専任・正規の学校司書でなければならないと考えたのか）」「どんな人がどう関わり、どんなことをしてきたのか」をまとめてほしいという依頼があった。

「石川・学校図書館を考える会」は 1994 年から活動している市民の会である。始まりは文庫やおはなしの会で子どもと本を結ぶことに心をくだいてきた母親たちでつくられた。全国には同じような思いでつくられた多くの会があり、一番多い時には 100 を超えていたという。※1

約 30 年続いているとはいえ、一地方の市民の会のことを、今知っていただくことに意味はあるのか？ と、半信半疑のままではあるがお引き受けした。

2. これまでの配置の推移と現状

まず、「なぜ石川県では近年も学校司書配置が進んでいるのか」という問いについては、決して順調に進んでいるわけでもましてや十分なわけでもないことをお断りしたい。30 年前を考えると、ずいぶん前に進んだなと思うことも確かに多くあるが、まだまだ遙かだな、これからだなと思うことも多い。以下、これまでの司書配置の推移と大まかな県内の現状を述べる。

1994 年に会をつくり、活動をはじめて 1 年後、突然、小松市長の英断で県内公立小中学校初の学校司書 1 名が、嘱託ではあるが専任で配置さ

れた。小松市はその後も毎年少しずつ配置を進められ、学校現場や市民の粘り強い働きかけもあって、13 年後の 2008 年に全 35 校（当時）が専任配置になっている。

小松市に配置が始まって 2 年後の 1997 年、隣接する松任市（現白山市）にやはり市長の英断で配置が始まった。1997 年に採用された 5 名は嘱託だったが、翌 1998 年には 9 名が採用され、前年の採用者も含めてすべてが正規職となった。2 年間で松任市内の小中 13 校すべてに専門・専任・正規の学校司書が配置されたことになる。

ここまで本当に私たちも驚くほどの展開だったのだが、専門の司書が入った学校図書館の変化を目の当たりにして、先生方からの要望や各地の市民の活動がどんどん活発になり、県内自治体で次々に配置が開始されていった。平成の大合併を経て現在の 19 自治体の形になり、2015 年にはそのすべての自治体に何らかの形で配置が広がった。

2023 年現在、会を作った時点で 0 名だった公立小中学校司書は 211 名（有資格者は 159 名。2010 年から資格のない方もカウントしている）になっている。1 校専任での配置が 158 名、2 校兼任が 43 名、3 校以上の兼任が 10 名で、県内の公立小中学校総数は 275 校（小中併設 8 校を含む）であるから、専任の人がいる学校の割合はそれでもようやく 5 割 7 分である。19 自治体のうちで全校が専任なのは 10 自治体である。

石川県は、金沢市以外はこぢんまりした自治体が多く、学校数が一桁のところも半数を超える。どこも子どもが減り、財政難は共通である。過疎

化が進み、統廃合の計画があるところも多い。しかし学校数が減っても司書数は減らず、専任の人がいる割合は少しずつだが増えている。また、少しずつでも増員し、配置状況を改善している自治体も確かに毎年ある。この背景には、学校図書館の教育力への認識と期待が高まり、文部科学省の方針としてもその活用が求められてきていることが大きいのではないだろうか。お隣の富山県でも同様の現象があるようだ。

「石川県では近年も配置が進んでいる」という印象は、もしかしたら昨年の『学図研ニュース』No.437 に掲載された金沢市の報告、「やっと動きだした専任への道」の印象があるためではないか。

会の世話人でもあり、「金沢に豊かな学校図書館を願うボランティアネットワーク」（以下「ボネット」）の志村由紀子さんがそこに書いているように、金沢市は長く“司書教諭とボランティアによる運営”を方針としていたが、新市長の当選により、2011 年から学校司書の配置を開始。3 年間で 40 名、約 80 校ある小中学校すべてが 2 校兼務になるまで順調に配置が進んだ。しかし、その後 7 年間の停滞があり、一昨年からようやく小学校への専任配置計画が開始された。以後、毎年 3 名ずつの増員があり、現在 75 校中 17 校が専任となっている。

市は今後も計画を進められる方針で、まだ専任化計画のない中学校も含め、会では今後大きな期待をふくらませている。ただ、全員がパートタイムの会計年度任用職員（週 29 時間）で、5 年ごとの更新、最長 15 年の雇い止めがある。

県内の正規司書は、旧松任市を含んで合併された白山市以外では、川北町、津幡町、宝達志水町にそれぞれ 1 名いるのみで、他はほとんどがパートタイムの会計年度任用職員である。白山市は、学校数 27 校で正規司書は 17 名。2005 年の合併後にも 4 名の正規司書が採用されており、今後も少しずつではあるが正規での採用を考えられているようだ。これは市としての確かな方針が感じられ本当に心強い。正規職以外の会計年度任用職員

も、支援センターの 2 名を含めて全員がフルタイムの専任であり、全国的に見ても確かに良い条件と言えよう。

また、配置が始まって以来、ほんの数年を除き、学校司書の数は毎年必ず県内のどこかの自治体で増えており、それを喜び合うことが活動を続ける励みになってきた。

県内の配置状況の推移と現状は大体以上だが、雇用条件は全体に悪く、低賃金で、雇い止めの心配も常にあり、毎年退職者や欠員の問題がでている。地域による格差も大きい。

会では今年、県内司書に「一人一台端末導入後の学校図書館の変化」をアンケート調査し、約半数の方から回答を得たが、学校図書館を情報の拠点として捉え、教育に活かしていこうとする学校現場の意識はまだ低く、石川県の教育振興基本計画にほとんど学校図書館の記述がないことも大きな課題だと感じている。

次に、私たちの会が考えてきたことややってきたことを「会の出発点」「図書館の力」「市民の会」「学校現場とのつながり」「時代の変化」の見出しを立てて紹介してみる。

3. 会の出発点

会の出発点はなんといっても岡山市の司書の方たちによって 1991 年に制作されたビデオ『本があって人がいて』に出会ったことである。※2 1993 年 12 月、蔵書を 1.5 倍にするという国の「学校図書館図書整備新 5 か年計画」が「金沢おはなしの会」で話題になり、金沢ではどうなっているの？ と市に聞きに行くためだけに会を作り、当時一番仕事の少なかった私を取り敢えず代表に。その後すぐにこのビデオに出会ったことが会の方向性を決めることになった。

ビデオの中の学校図書館には学校司書という人がいて、よみたい！ 知りたい！ を支えられ、本にかけよる子どもたちの目の輝きといたら！ 蔵書だけがいくら増えてもこうはならないことは誰が見ても一目瞭然だった。

ほとんどすべての子が毎日通う学校の図書館がこんなだったらどんなにいいか。我が子の通う学校にも岡山市のような図書館が欲しい！

私たちは目の前が開ける思いとともに、同じ日本の中なのにそのあまりの差に愕然とし、怒りさえ覚え、子どもたちに申し訳なくてじっとしてはいられなくなったのだった。

会報No.1には手書きの文字で、「ささやかな声でもまずあげて、あげつづけていくことが私たちの願いを実現するためにどうしても必要なことと思ひ皆さんに呼びかけます。会員大募集いたします」とある。

とはいえ、自分たちがまず学校司書が何をやる人なのかを学ぶところから出発する状態だった。ちなみに学校司書への世の中の認知度も全くゼロに近い状態で、母親仲間には「うちの子は本嫌いだから悪いけど学校図書館は関係ないわ」と言われ、先生方には「本好きを育てるのは基本的に国語科でと考えている」「そんなにサービスしたら子どもの自主性が失われる」と。教育委員会では「あんな人の来ないところにお金はかけられない」とまで言われたことがある。多分これは石川県だけのことではなかっただろうと思う。

けれども、ビデオの中の学校図書館を知ってしまった私たちに諦めるという選択肢はなく、岡山にも最初の一步はあったはずと、とにかく学び、学んだことを周りに知らせることから始めることになった。会の出発地点であるビデオに出会うことができ、目標とする頂をはっきりイメージできたことは、その後迷わず進んでいく上で本当にありがたいことだったと思う。

4. 図書館の力

その後、沢山の学習会や講演会を経験して、図書館とはどういうところか（多様な資料に出会う・人の自立を助ける）司書とはどういう人か（ジャッジをしない・資料の世界の地図を持って）学校司書が入ったらどうなるのか（時間も距離も超えた資料の世界への扉が開く・学校の中

に図書館があることで教育が変わる）などを学んでいくにつれて、私たちは、「学校図書館のことは子どもたちの幸せに必ず役に立つどうしても必要なことだ」と確信するようになっていった。

会をつくって間もない1994年に富山市で開かれた「まなびピア富山'94」での講演で、塩見昇氏は、「学校図書館は本好きの限られた子のためにあればいいところではない。放課後に本と出会うための場所でもない。教育活動の中でこそ、すべての子どもたちと先生がその必要に応えるサービスを受けられる場所であるべきだ」と当時の私たちにとってのまず一枚目の鱗をはがして下さった。

さらに、氏は、1997年に倉敷市で開かれた「学校図書館に「人」を置こう！全国の運動を語り合うつどい'97」で「学校図書館の「はたらき」としての認識が進んできた。専門の人の配置は重要な、しかし“本物の図書館”への一步にすぎない。“何をする専門家か”という中身で問うことこそが重要」と語られ、「学校図書館のあるべき姿をきっちり描いて努力を積み重ね、それを皆で共有していく」必要を訴えられた。

学校図書館がその教育力を発揮するためには専門の司書がいることが前提となる。では、司書とは何をやる専門家なのか？ そのイメージを豊かにきっちり描こうと配置されたばかりの県内司書の方たちと一緒に、1997年1998年と連続して岡山市の司書の方たちに来県いただいてお話をうかがった。

永井悦重氏の回の記録には、「学校図書館は、授業に出られない子も含めてすべての子どもを視野に入れ、一人一人を大切に資料提供していく所であり、教師や保護者も対象／人と資料を結びつけるために利用者を知る努力が大切／資料を知る不断の努力が必要／多様性のある資料をそろえることが図書館に求められる質／必要な資料の提供、ブックリストの作成、ブックトークなどで授業に協力／日々のおしゃべりを通して知る権利の保証や基本的人権を守ることの姿勢を示す／良き利

用者として社会に出ていけるようにするのが学校図書館の役割」とある。その仕事が多岐にわたり、深く広いことに目が回り、あまりのことにくらからするほどだったが、目標は高いほど迷わない！と励まし合った。

子どもたちの日常に機能し、役立ち、楽しみ、信頼される学校図書館の運営は、教師の片手間でできることではない。先生方に司書のいない図書館を活用せよというのはいうこと自体が無理なことだとわかってきた。もちろん、人の善意に頼るボランティアで成り立つ仕事ではない。ボランティアにできるのは豊かに彩る手助けであって継続は保証されない。子どもたちの育ちに不可欠な仕事には、きちんとした制度として学校司書が必要である。

竹内愨氏から、「図書館の力」そのものを教えていただいたことも大きかった。氏は、「学校図書館も図書館です。小さくても器の中の満月が完全に丸いように」と言われ、1997年の石川県図書館大会では、「利用者にとっての図書館は連続と平行である。幼い頃近くに文庫があればそこで初めて本と出会い、利用者になります。小学校に入学すれば小学校の図書館に、中学校、高等学校、大学と連続してそれぞれの図書館の利用者になる。そしてまた、文庫に行きながら公立図書館に、小学校に行きながら公立図書館も利用する。というように利用者はそれぞれの図書館と公立図書館を“連続”“平行”して利用していくのです。公立図書館の利用は人が生涯利用する図書館として“終わり”がないのです」「図書館は教育の“育”を受け持つ。”教“には、目標を立ててそこに向かって引っ張っていくという意味があり、“育“には、十分な準備があって待つという意味があるのです。図書館は“育“の部分を受け持ち、人の成長にかかわり、成長を待つところなのです」と語られた。

氏のお話に感激した私たちは、翌 1998 年には来県いただき「石川子ども文庫連絡会」「図書館フレンズ鶴来」「松任市の図書館を考える会」「金沢おはなしの会」「金沢市立泉野図書館」小松市

や松任市の学校司書の方たち等々と協力して、3か所を会場に、二日間で延べ 300 人に近い方たちと共にお話をお聞きしている。

竹内氏にはさらに、「第 14 回全国生涯学習フェスティバル 学びピア石川 2002」の協賛事業として行った、シンポジウム「図書館は生涯学習の基地—はじまりは子ども時代—」の基調講演をお願いした。その冒頭で氏は、「生涯学習というのは生まれる前から本人の終わりの日まで続く、成熟と成長への努力のことだと私は考えています」「図書館はそれを助けることを目的とする。そのために働くところ。本を並べて、貸すというのは図書館の目的ではなく、目的を実現するための大事な活動なのです」と語られた。

このシンポジウムの午後からのパネルディスカッションでは、「すずらん文庫」の渡辺順子氏、「全国の学校図書館に“人”を！の夢と運動をつなぐ情報交流紙『ぱっちわーく』」（以下『ぱっちわーく』）の梅本恵氏、石川県立図書館長の岸本衆志氏にもパネラーとなって登壇いただいたが、竹内氏はその最後にまとめとして、「図書館の持つ可能性を生かすために、皆さんのお考えを“持ち寄り、まとめ、そして分け合うこと”を進めていただきたい」とよびかけられた。この日の記録は会の 10 周年記念事業として冊子にまとめ、以来私たちの会の大事な指針になっている。

学校図書館は教育の中でこそ、考える子どもすべてを支えるためにこそあるのだ。そして学校図書館で身につけた力は、その子の生涯にわたっての成長を支える。

この“すべての子ども”の持つ意味を考える時に、思い出されるのは伊藤峻氏の言葉である。氏は、『いいこ みつけた』※3の中で、「公共図書館の児童サービスが究極の目的とするところは、地域のすべての子どもが良い本を十分に読んで育ち、読むことの楽しさと、主体的に調べ、学び、考える態度を身につけることである。ここで、“すべての子ども”というのは、二つの意味がある。一つは、十分な条件さえあれば、地域のどの子ども

そういうことを身につける力、可能性を持っているということであり、他の一つは、全部の子どもがそのように育つのでなければ、本当に人間的な、民主的な世の中を作ることにはできないということである」と書いている。

その頃、道を聞かれて親切に教えたために亡くなってしまった児童の事件などがしばしば報じられていた。「我が子だけをいくら一生懸命に優しく賢く育ててもだめなのだ。社会全体の平和と発展がなければ我が子だけの幸せなどありえない」と感じていた私たちは、図書館は「みんなで賢くなってみんなで幸せになることに役立つところ」なのだ、「知は平和なり」「図書館は民主主義の基礎」というのはこういうことだったのかと納得した。

そして、すべての子どもには考える環境が保障されていなくてはならない。それはユネスコ学習権宣言やユネスコ学校図書館宣言にも高らかに謳われているのではないかと。

会をつくったごく早い段階で、沢山の学ぶ機会を得、学校図書館の大きな可能性と子どもたちの生涯にわたって役立つ“図書館の力”を確信した私たちは、さらに活動を広げていくことになる。

1997年の会報No.12にはこう書いている。「会が発足した頃は、私自身、環境や原発のことを考える方が先なのではないかと思っていただでした。今では学校図書館のことは他のことと同じくらい大事なことなのだ」と自信を持って言えるようになりました。様々な困難な状況を自分で考え切り開いていくことのできる子どもたちを育てることに関わる問題なのだということがはっきりわかってきたからです」

この思いはその後もずっと変わらず、2016年の最終会報No.70では、「自分の頭で考える人になってほしい。想像力を手に、情報に的確にたどり着き、読み取り、判断し、人とつながって発信し、あきらめずに平和を築いてほしい。子ども達の成長を願うこれらのどれをとっても図書館にできることの可能性はますます大きく、私達の図

書館への期待は会の始まりの時と変わらず、いえそれ以上に切実です」と書いている。

5. 市民の会

最初に司書の配置が始まった小松市、続いて松任市、そして金沢市でも、配置を決め施策を進めたのは直接的にはなんといっても首長の考えが大きかったと言える。首長の決断やその後の配置の進展の背景には色々な要素があると思うが、一つの要素として市民の会が果たした役割も大きかったのではないかと思う。

会の出発は、先にも書いたが、まず自分たちが学ぶところからだった。1993年に「富山・図書館を考える会」を立ち上げられたお隣の富山へは何度も出かけ、学習会に参加させてもらい、会を立ち上げる時から今に至るまで、本当にお世話になっている。

1996年に富山での講演会でお聞きした、岡山市職員労働組合中央執行委員長の長崎司氏の「運動への6つのアドバイス」は、会を立ち上げたばかりの私たちにとって大変参考になるものだった。①現状を固定的に考えず、深刻に考えない。ノーテンキに！ ②市民世論が大切 ③教育委員会と仲良く。どの人も悪くしようとは考えていない ④配置されてからがスタート ⑤全国との連動 ⑥まずは仲間を3人つくる の6つである。

富山の活動に刺激を受け、6つのアドバイスも得て、少しずつ自分たちでも学習会を開くようになる。『ぱっちわーく』も購読開始。世話人会も定期的に持ち、学んだことをとにかく伝えようと会報を発行し始める。

とはいっても、県内小中学校に司書の配置がなかった初めの頃には何をしてもよいか定まらず、少々遠回りだが「まず沢山のの人に本の世界の楽しさを知ってもらい、そこに司書がいればどんなに可能性が広がるかをわかってもらい、学校図書館のイメージを正しく持ってもらう」と考え動き始めた。

いろいろな場所と手段を活用している。もともと

とおこなっていた学校でのおはなし会や地域での文庫活動。加えて土曜休日に学校で文庫を始めたり、PTA の役員を引き受けたり。イベントで津田妍子さんを講師に科学遊びの会を開いたり、学校見学をさせてもらったり。それらさまざまな場所で、ビデオを上映したり会報を配ったりして学校図書館への理解を広げようとした。また、自分自身ももっと学ぼうと個人的に司書教諭や司書の資格を取得した方も何人もいる。そして首長と直接話せる機会には逃さず出かけた。

小松市の配置は、「小松図書館友の会」主催の「図書館の夢を語る会」で、図書館に人のいることの大切さを、おはなし宅急便活動を踏まえて市民が市長に訴えたことがきっかけだった。旧松任市での配置も、「市長と語る会」での市民の訴えが届いたものだった。

小松市や松任市で配置が始まると、活動は勢いづいていく。1997 年からは、入った司書の数を見出しに、学校司書のいる図書館の様子を写真で分かりやすく紹介した B4 版の会報号外も発行開始。会報と号外を持って教育委員会を訪問。とにかく司書が入った学校図書館を見に行ってください！ とお願いした。県の図書館大会や学校図書館大会にも積極的に参加し、学校図書館に専門の人を！ と訴えた。

学びも続けた。自前の学習会を開き、配置された司書の方たちと一緒に、豊中市へ 17 名で見学にも行った。「学校図書館を考える全国連絡会」や『ぱちわーく』主催の岡山や東京での集会で実践報告の機会をいただき、その場でも沢山のことを先進地から学ぶことができた。学校図書館問題研究会にも 1997 年に入会している。

学んだことや考えたことは会報にしてできるだけ沢山のの人に伝えた。竹内氏が言われた言葉「図書館も学校図書館も人によって生きたり死んだりすることを、どうぞ繰り返しいろんな人たちにお伝え下さい。1 人にでも 2 人にでも」「印刷物はタンポポの綿毛であり、方々に散った中のいくつかは根付いて花が咲くということもある。伝えた

い情報を載せた印刷物にはごみ箱に捨てさせない美しさも持たせなければならない」なども頭に、とにかく丁寧な粘り強く伝える努力をしたと思う。新聞の投書欄にも「学校図書館に司書を！」の投書が何度も掲載され、記事の中に学校図書館が話題になることも増えていった。

自分たちの町の子どもの育ちは国の施策や人任せにはできないことなのだ、各地で活動が広がり、市民の会が次々につくられていった。

1999 年 4 月、旧野々市町（現野々市市）では小学校の読み聞かせボランティア「おはなしのゆりかご」が、「あくまでも学校図書館に司書の配置を望んでおり、そのための読み聞かせのグループである」と掲げて活動を始めた。その直後の 7 月、中学校の生徒会役員と町長の「夢トーク」の場で、中学生の質問に町長が「導入を検討」と答えたことが新聞記事となり話題になった。野々市町ではその後すぐに配置が始まり、2001 年には全 7 校が専任専門配置となっている。

加賀市では 1997 年に読み聞かせグループ「山代小学校みみずくの会」ができ、市長に司書配置の願いを伝えるための事前学習会を開いている。その後、読み聞かせグループは他校にも広がり、1999 年に誕生した新市長に、会員が直接学校司書配置の願いを伝えたと聞いてすぐ、加賀市でも小学校への配置が始まった。2000 年には「加賀・江沼子どもと本を結ぶ会」がつくられ精力的に活動。現場の先生方からの要望も大きく、2012 年には 18 名まで配置が進み、現在は 1 校専任 14 名、2 校兼任 4 名となっている。

また、旧河北郡の 5 町では、1996 年に「河北おはなしボランティアやまんば」がつくられ、小学校へおはなし会に出かけ、先生方ともよい関係を築いておられた。2001 年内灘町に最初の司書が配置され、3 町が合併してできたかほく市と津幡町にも少しずつ配置が広がっていった。その後も、図書館を愛する仲間「図書館大好き！わたしとあそんで」を中心に、公共・学校・ボランティアの三者と一緒に「図書館のことを話し合う場」を

大切に活動されてきた。このつながりは形を変えて今でも継続されている。かほく市では、2020年に全校専任配置となり、新しいかほく市立中央図書館には学校図書館支援室が置かれている。

能美市でも、小学校におはなし会を届けてきたグループ「辰口おはなしの家」のメンバーが教育長を訪問して願いを届けたり、合併前の旧3町の公共図書館司書や図書館ボランティアなどからの働きかけもあり、2008年から全校配置になっている。

金沢市では、市が開講した「学校図書館ボランティア養成講座」をきっかけに、2001年に前述の「ボネット」が立ち上がり、本当に粘り強い活動があった。詳細な報告が2011年の『ぱちわーく』No.221にある。活動の年間計画を立て、①“子どもの本の学び”と“学校図書館の可能性についての学び”②学校ボランティア相互のお話会を含めた交流③行政との窓口の3つの役割を10年間続けられた。市の教育委員会、市議会議員、公立図書館、ボランティアの「この10年間の歩みの中で育ててきた学校図書館を思う様々な立場の人のネットワークは、今、市全体で司書を応援し、学校図書館を活性化させていこうという力になっています」と書いている。当時の新市長の山野之義氏は1997年の倉敷の集いにも参加されていて、当初からの会員であり理解者だった。現在、配置計画は次の市長に引き継がれて進行中である。

振り返ってみると、今あげた自治体ではほとんどで全校専任配置が実現している。配置のきっかけやその後の施策の継続や充実に市民の会の力は大きかったといえよう。

石川県では1983年につくられた「石川・子ども文庫連絡会」での交流や、各地の「おはなしの会」などが相互につながりを持っている。当初より石川県全体を視野に会をつくった所以である。県内に少しずつ司書の配置が始まり、各地にそれぞれの町の事情に応じた市民の会ができ、それぞれに活動を始めると、私たち「石川・学校図書館を考える会」の役割も変化していった。

2000年には会員数は200を超え、活動目標は、①学校司書と司書教諭がいて日常に機能する学校図書館の必要性をさらに多くの人に知らせる②配置された学校司書を応援する③各地の声をつなげていくとしている。

配置された学校司書の応援団として、毎年学校司書歓迎会や市民・教員も交えた交流会を開き、司書配置後の学校図書館の充実のために学習会を開くことが増えていった。研修に出かける司書の旅費補助をしていた時期もある。会報には様々な場での学びの記録に加え、増えていく県内の配置情報や、学校司書が入った現場を伝える声を司書・教員・市民それぞれから募って掲載した。

会報は会員制をやめる2016年のNo.70まで発行を続けた。その後は、毎年県下の各教育委員会へ学校図書館職員配置状況のアンケート調査を実施。結果の一覧表と地域連絡係の方からの情報をホームページに掲載。また、この二つをもとに、その年の県内状況をB4用紙一枚の印刷物にまとめて発行している。月に一度の世話人会と、次で紹介する七夕の時期の「七夕研修会」とともに現在の活動の中心である。

6. 学校現場とのつながり

市民の会にとって、現場の先生や司書の方たちとのつながりを継続していくことは案外難しい。

筆者は1995年に金沢市から松任市に転居したのだが、直後に長男が通う中学校の親子奉仕活動に参加し、同地区に住み、同じように長女と参加していた中條敏江さんと再会したことはその意味でとても大きかった。

中條さんは高校の同級生で、長く図書館教育に取り組む小学校の司書教諭だった。すぐに会員になってくれて、退職後の今は会の世話人として月に一度の世話人会にも参加してくれている。

出会ってまもなくの1997年から旧松任市で学校司書の配置が始まり、以後は県内のトップランナーとなった松任市の教員として、学校図書館をけん引する存在となった。

「たとえ不十分であっても自分たちの実践を発信することが大切」との彼女の一言で、1999年からは県内の様々な学校図書館の実践を発表する会を何度も開いている。発表者は、初めのうちは中條さんに相談しながら交渉していたが、人選や実践内容について、現場を知らない市民の会では次第に手に負えなくなってくる。

そこで、中條さん自身の研究にも、学校司書の学びにも役立つのではないかと、旧石川郡と旧松任市の教員・学校司書・市民の有志で、2003年に「石川・松任の学校図書館を考える会」（現在の「野々市市・白山市の学校図書館を考える会」）を立ちあげることになる。当初、集まった場所が国道沿いの「すばる」という喫茶店だったことから、通称が「すばるの会」となり、月に一度集まり、隣接する2市の学校司書・教員・市民の学びと情報交換の場になってきた。ここ数年は主に年に一度の「七夕研修会」の実行委員会の役割が大きくなっている。

「七夕研修会」は、2005年から石川県青少年研修センターを会場に、県が主催し「石川・学校図書館を考える会」と「すばるの会」が共催。市民・教員・司書の三者が協力する貴重な場となってきた。費用面で県の支援が受けられることは大きく、全国から講師をお迎えして県内各地からの参加者と一緒にお話をお聞きすることができた。初回は泊りがけで、土居陽子氏にも来ていただいている。一人職場で、研修も十分とはいえない小さな自治体の司書にとっても、先進的な取り組みを知る貴重な場であったと思う。

2016年からは講師のお話の後に、県内学校司書10人ほどによる「一人2分間プレゼン」が恒例となり、コロナ禍で中止になる前までは、県内各地の実践を交流するよい機会にもなっていた。

中條さんのモットーは、「特別な技術や特設の单元などでなく、だれもが教科・教科書の中で普通に取り組める実践を！」である。2001年には「学校図書館を考える会・近畿」で「総合的学習と情報教育」の演題で話している。2006年には

科学研究費助成事業の採択を得て利用指導のパッケージサイトのサイトを立ち上げ、学図研ニュースでも紹介。その他、自身の研究に関係してのミニ学習会や、教科書が新しくなればその研究。2006年からは白山市で「図書館を使った調べる学習コンクール」も開始。これは現在、少なくとも県内の4つの自治体に広がっている。図書館や授業の見学者を多数受け入れ、県内外の学校や教委、「市民の会」の学習会にも招かれて、学校司書の入った学校図書館の実践を発信した。退職の2015年には「第28回北信越地区学校図書館研究大会 白山・野々市大会」で、“授業に特化した大会”を掲げて実行委員長を務めている。

勤務しながら、夜の「すばるの会」に集まり、会の一員として教員の立場から市民や学校司書とも忌憚なく意見を交換してきた。司書の方たちは、普段は遠慮して聞けないことも、言えない悩みも話すことができ、学ぶことができたと思う。市民はともすると理想論に走りがちだが、学校現場の事情を知る彼女に何度も現実を教えてもらった。

彼女の後輩で、「七夕研修会」の名物司書であり、野々市市で昨年度の石川県学校図書館研究大会の実行委員長を務めた中野淳子さんとともに、学校現場と市民をつないでくれる私たちの会の大切な仲間である。

「七夕研修会」の参加者は、当初、市民：教員：司書が1：1：1であったが、現在は8割が学校司書になっている。研修の内容は、学校図書館活動や教育の中身の充実のためのもので、当然のことだがすでに市民のフィールドではなく、市民はだいぶ前からもっぱら運営に回ってきた。同日に開いてきた各地の司書や市民の交流会などもコロナ前から次第に開かれなくなっていった。

配置が進み、ある程度固定化すると、市民の関心はどうしても離れがちになる。せめて、年に一度の新年度調査の時期には教育委員会や学校現場を訪ねて「学校図書館頑張ってください！」と伝え、応援を続けようねと地域連絡係の方たちに呼びかけてはいるが、その地域連絡係も市民の会の

メンバーから学校司書に入れ替わってきている。

7. 時代の変化

この 30 年間に学校図書館を取り巻く状況も大きく変化した。

私たちの会の発足が 1993 年の文部省「学校図書館図書整備等 5 年計画」がきっかけだったことは前述したが、その後、1997 年と 2014 年の学校図書館法の改正を経て、今では不十分ではあるが法律に「学校司書」が明記されるようになった。

この間には様々な議論があり、会として「学校図書館を考える全国連絡会」の声明に賛同して国会議員宛にファックスを送ったり、当時の馳浩文部科学副大臣（石川県選出）を訪ねて、学校司書施策後退の懸念を訴えたりもした。日教組の「専任司書教諭化を！」のパンフレットの意味するところが分からなくて、教組を訪ねて質問し、私たちの考えを伝えたこともあった。

2023 年 5 月に「日本図書館研究会 学校図書館史研究グループ」がまとめられた『塩見昇の学校図書館論 インタビューと論考』が出版されたが、その中で塩見氏は、二度の法改正は「それなりの貢献はしている」としつつ、「放っておくとジワジワとそのレベルが固定化していったり、あるいは人がいるということが非常に浅いレベルで広まっていくという困った状況が、今です」と語っている。

課題は残るが、いわゆる「四者合意」の時代などを考えると、あれほどの意見の食い違いがあった学校図書館職員の問題について、時間はかかったがここまで共通理解が進んだのはすごいことだと思う。学校図書館を何とか中身のある、教育に役立つものにしようとかかわられたすべての人の思い、出会いが少しずつ前に進めてきたのだと思われ、関係の方々のご努力に本当に頭が下がる。

文部科学省は、2009 年発行の「学校図書館のチカラを子どもたちのチカラに……ここに、未来への扉」のリーフレットで、公的に「学校司書」を使って以来、地方交付税で配置のための予算を

増やしてきた。

また、学習指導要領の中でも「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り」とし、「探究」をキーワードに、自分で問いを立て、調べ、まとめ、発信することが求められるようになっていく。日常に学校図書館の機能がなくては成り立たないであろう。

加えて「GIGA スクール構想」も始まり、子どもたちが向き合う情報の世界は複雑さを増している。1 人 1 台端末がかならずしも学校図書館にとってプラスに働いていないという状況も耳にするが、本来情報の世界がデジタルにまで広がっていくほどに、情報の専門家である司書の役割はますます大きくなり、そして、その仕事の基本は変わらず、永井氏の示されたものに尽きるのだと思う。

2023 年 7 月に、大正大学を会場におこなわれた学校図書館法公布 70 周年記念シンポジウム「学校司書の社会的地位の向上を目指して」をアーカイブ動画で視聴した。基調講演で片山善博氏は、「子どもたちのための地方交付税予算を本来の目的に使っていないのはその自治体の品位が問われる」「まだまだ学校図書館のミッションは了解されているとはいえ「学校司書」も理解されていない。校長、首長、議員にこそ何とか理解してもらいたい」と語られた。その後のパネルディスカッションでは、会計年度任用職員制度になって、30 年務めたベテラン司書が転職されたことなども紹介され、求められている専門性とあまりに劣悪な待遇との差の大きさが訴えられた。

学校図書館への理解は随分前に進んだが、まだまだ課題は大きい。

8. おわりに

「市の方針・現場の頑張り・市民の応援、どれも不可欠」「理想はグローバルに、運動はローカルに！」この二つの合言葉は、1997 年に豊中市の「学校図書館を考え専任司書配置を願う市民の会」の安達みのり氏に来ていただきお話をうかがって以来、私たちの会の合言葉にもなっている。

これまで述べてきたことを振り返っても、本当にその通りだとわかる。

また、『ぱっちわーく』は2017年の終刊まで全国各地の活動や行政の情報を毎月届けて、私たちに考える材料を提供し続けて下さった。『ぱっちわーく』というのは本当に素敵なネーミングだったと思う。子どもの幸せを願い、学校図書館の可能性に期待しつつ、その時できることを努力する人たちによって、キルトの一針一針が縫われていくことがイメージされる。『ぱっちわーく』がご縁でつながった富山や静岡、丸亀の市民の会からは今も定期的に会報をいただいている。

実は「すばるの会」は終了を考えている。中條さんが現場を離れて時間がたったことが大きい、個人でも、僻地でも、オンラインで交流したり、学びの情報にアクセスできるようになったことも大きい。今後、市民は何をするのが学校図書館の応援になるのか改めて考えている。

会がこれまで続けて来た学校図書館の人の調査や、ホームページの運営は、金沢市の推移を見守るためにもしくはは続ける予定である。馳氏は現在石川県知事だが、教育振興基本計画や高校司書のことなどについてお話をうかがいにいきたいとも思っている。

文庫やおはなしボランティア等が続けながら、例えば公共図書館主催の「かほく市子どもの読書活動交流会」のような場や、県の図書館大会や自治体の読書活動推進協議会などに参加したりはできるだろう。何より「学校司書と司書教諭がいて日常に機能する学校図書館の必要性をさらに多くの人に知らせる」という“市民の応援”は、変わらず求められているのだと思う。

安達氏は2009年の「学校図書館を考える全国連絡会第12回集会」の会場で、自分の町の八方ふさがりを嘆く声に対して、「そういうときにこそ市民の働きかけが大切ではないのか」ときっぱり答えられたことがある。考えてみると、たとえ国の施策が整ったからといって、すべての問題が解決し、新しい教育が実現するわけではない。ど

の町にもそれぞれの課題があり、それぞれの苦しきがあるが、それは基本的にその町の住人が担って一歩ずつ前へ進めていくべきものなのだとはたとさせられた。

現在、安達氏は、豊中市の図書館縮小計画に反対し、署名活動を中心に活動を展開されている。先日『子どもと読書』7・8月号の中で、「図書館づくり運動を50年やってきて、時々この図書館を使う未来の子どもたちはどんな子どもなのだろうと思うことができました。今、その子どもたちと一緒に歩んでいます」と書いておられ感激した。

私たちの会でも、今年度「すばるの会」の若い正規司書の発案で、Google Formsを使ってアンケートの発信・集計をおこなった。世話人のおじいちゃんのすぐ熱くなる印刷機で、カタカタいう音を聞きながら会報を印刷したころとは大違いである。次の世代の若い人たちの力は、何といっても私たちみんなの希望である。

最後にもう一度竹内氏の言葉を引用したい。「人類は恐竜と同じく滅びる運命なのかもしれない。でも恐竜は図書館を持っていなかった。図書館は滅びることを少し遅らせることくらいはできるのではないかと思っているのです」「挫折したらまた始めれば良いのです」「無駄とも思える努力をどうぞ蓄積して下さいますようお願いいたします。それが力になります」

依頼を受けて書き始めたらあれもこれも思い出され、書ききれなかった。お名前をあげることができなかったが、改めてこれまで会にかかわってくださったすべての方に感謝したい。

※1『ぱっちわーく』No.114(2002)掲載の「学校図書館づくりに取り組んでいる会」は63団体

※2『本があって、人がいて—学校図書館と子どもたち』岡山市学校図書館ビデオ制作委員会

※3『いいところ みつけた—動き出した豊中の学校図書館—』学校図書館を考え専任司書の配置を願う市民の会(1995)